

地域社会を核とした教育と研究のつながり
「教科指導力の高度化」を中心に

特別支援教育講座 加藤哲則

1. 大学院レベルの教科指導力高度化

教育学部が地域に根ざした教員養成学部として改組され、今後大学院改組も進められる中で、教員養成に特化したカリキュラムが走り始めたことは、これまで以上に地域と密着した教員養成のあり方が問われているといえる。

今回 FD シンポジウムで取り扱われた大学院レベルの教科指導力の高度化に関する報告は、国語科・社会科・美術科について行われた。

いずれの話題提供にも共通することは、本学の附属学校・園だけではなく、地域の学校の授業をフィールドとして活用しながら、学生の教科指導力高度化を目指しているところである。さらに今回の報告の中で、社会科の報告では、既存修士課程の教科教育専攻の学生と教職大学院の学生との協働による主権者教育の実践を県内複数の県立高校で実施したことが特記される。地域の学校を学修のフィールドとして、教科の指導力向上に取り組むことは、正に地域に根ざした教員養成というテーマに沿った教育活動であると考えられた。加えて、既存修士の学生と教職大学院の学生の協働による授業研究が行われたことは、今後の教員養成の方向性をも示唆するものであった。

2. 特別支援学校での指導力高度化に向けて

現在の特別支援教育専攻の開講科目では、地域の学校をフィールドとした授業が十分に保障されていない。地域の小学校をフィールドとした特別支援教育コーディネーター専修の実践研究科目と同じく特別支援教育コーディネーター専修の附属特別支援学校をフィールドとした科目は開講されているが、やはり地域の県立特別支援学校を活用することが、今後必要になると

考えられる。特に県立特別支援学校の幼児・児童・生徒の障害の重度化・重複化に対応できる指導力の向上が求められ、地域のニーズに即した教員養成を行っていく上では、学部教育に立脚して指導力の高度化を図る必要がある。そのためには、大学院レベルの指導力の高度化においては、附属学校・園での実践教育ではなく、地域の特別支援学校や特別支援学級での実践教育の確保は重要である。

一方で、知的障害特別支援学校以外の視覚特別支援学校や聴覚特別支援学校・肢体不自由・病弱特別支援学校では、小学校・中学校・高等学校と同様に教科指導が行われており、障害に対応する指導力の向上と共に障害のある子どもへの教科指導力向上も必要である。この課題に対応するためには、学内での教科教育と特別支援教育の協働が必要になると考えられる。

3. 今後の授業改善に向けて

今後の授業改善の方向性として、地域に根ざした教員養成の視点は常に必要である。特に特別支援教育専攻では、現在検討が進められている教職大学院への移行に向けて、教職大学院科目にある実習科目の実習連携先や課題研究の連携先として、県立特別支援学校と大学院教育学研究科との協働を模索し始めなければならない。先にも述べたとおり、学内での教科教育との協働による授業運営も検討を始める必要があると思われる。これらを通して、学生自らが地域に目を向け、学生自らが地域の特別支援学校や特別支援学級などの教育的な課題について、当事者として受け止めるための授業作りの工夫を進めていかなければならないと考える。